

## 英語学点描（3）

久保田 正人

本稿は2008年度千葉大学言語教育センター公開講座「英語のしくみ」（2008年8月23日、千葉県教育委員会後援）の内容の一部を文章化したものである。題名が示すように久保田（2008, 2009）<sup>1</sup>の続編であり、前2つの文章と同じく、中学校・高等学校の英語科の先生方（あるいは英語の教員を目指している学生諸君）がご自身で研究されるときに題材を提供するものとして、また教室で教えるさいの参考に供するものとして執筆したものである。したがって、説明にあたってはわかりやすさを旨とし、用語もできるかぎり伝統的なものを採用した。取り上げた項目はそれ自体ではよく知られているものばかりであるが、必ずしも正確な解釈が施されているとはかぎらないと思われるものを選んだ。本稿はそのような項目の本来の姿を精密に描き出そうとするものである。なお、提出した原稿について査読委員より貴重なアドバイスをいただいた。一部は本文に組み込み、一部は脚注の形で対応した。記して感謝の意を表する。

### 1. John is as tall as Bill. の解釈

授業で英語の文章を読んでいるとき、as...as... の構文が出てくると、ほとんどの学生は「同じくらい」という日本語を口にする。ところが、この日本語では文脈にそぐわないという違和感をわたくしはずっと持ち続けてきた。念のために国内外の辞書を概観してみたところ、辞典自体に適切な定義が見当たらない。問題の根はだいぶ深いようである。

辞書における定義がどうなっているか、まず英米の辞書から見てみることにしよう。

#### (1) 英米の辞書における as...as... の定義

- a. “as...as... used when you are comparing two people or things, or two situations” (*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (OALD))
- b. “You use the structure as...as when you are comparing things” (*Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary* (COBUILD))
- c. “to the same degree or amount: to such an extent : EQUALLY” (*Webster's Third New International Dictionary*)

<sup>1</sup> 久保田正人（2008）「英語学点描」『言語文化論叢』（千葉大学言語教育センター）第2号、pp. 13-51. 久保田正人（2009）「英語学点描（2）」『言語文化論叢』（千葉大学言語教育センター）第3号、pp. 111-138.

イギリス系の辞書である OALD や COBUILD はどちらも「2つ（以上）のものごとを比べるときに用いる」とのみ記述しており、定義の体をなしていない。アメリカ系の辞書である Webster 3 版は same や equally という表現を用いて定義しているが、same や equally とどこがちがうのかという肝心のところに言及がない。

それでは日本の英和辞典はどうなっているであろうか。代表的なものとして『ジーニアス英和辞典』の定義を見てみることにしよう。

(2) 『ジーニアス英和辞典』における as...as... の定義

5 [比較] a [as...as A (does)] Aと同じほど…, Aぐらい…, Aのように… 《◆(1) 前の as は副詞で, その後に形容詞・副詞を置く (→【副】). (2) 《略式》では前の as が省略されることがある. (3) Aの後が完全な文でなければ, (助) 動詞は省略することもある》 || He has as mūch money as I do. [《英》 I have, 《略式》 as me, 《正式・やや古》 as I]. 彼は私と同じくらい金を持っている / Mr. Brown's not as ōld as he looks. ブラウン氏は外見ほどの年齢ではない / The twins are as alike as two peas in a pod. その双子はさやの中の2つのえんどう豆のように似ている / Her face turned (as) white as flour. 彼女の顔は粉のように白くなった / She scolds Terry as often as (she scolds) me. 彼女は私をしかるのと同じくらいよくテリーをしかる. ◇[語法] (1) 否定文や強調の肯定文では前の as が so になることもあるが《今はまれ》(→not SO A as B). (2) He is not ás tall as his brother. では, He is not as táll as his brother. (彼は兄より背が低い) と違って, 「彼は兄と同じ背丈ではない」の意.

ここには「同じ」「同じほど」「同じくらい」という日本語が何度も用いられており、このあたりが一般的な理解なのだろうと推測される。ところが、「同じ(くらい)」という意で理解しようとする、説明に困る現象に出会う。それは as...as... の否定文の解釈である。ジーニアス英和辞典の例文でこのことを見てみることにしよう。

(3) as...as... の否定文の解釈

[1] Mr. Brown is not as ōld as he looks.

- a. 見た目より年齢が上である (×)
- b. 見た目より年齢が下である (○)

[2] He is not as táll as his brother.

- a. 兄より背が高い (×)
- b. 兄より背が低い (○)

ジーニアス英和辞典によれば、(3-1) と (3-2) の否定文は主語の方が程度が高いという (a) の解釈ではなく、主語の方が程度が低いという (b) の解釈になるというこ

とである。しかし、この解釈は as...as... を「同じくらい」という日本語で理解しているかぎり、予想外のものである。「同じくらい」の否定ならば、上の方に解釈が向かう場合((a)の解釈)と、下の方に解釈が向かう場合((b)の解釈)の2通りにあいまいになるはずだからである。それがなぜ下向きの解釈だけになるのであろうか。

さらにジーニアス英和辞典は(3-2)の文における his brother を「兄」と解釈している。なぜ「弟」であってはいけないのであろうか。

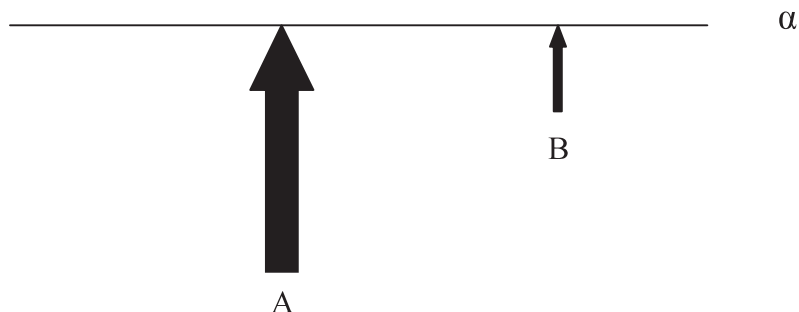
この2つの疑問は as...as... 構文の基本にかかわるものである。ジーニアス英和辞典の例文ではあまりよく見えないが、ふつうの文章に用例を求めてみると、この構文が用いられる文脈がはっきりと見て取れる場合が少なくない。次の例文を見てみることにしよう。

- (4) a. You're as tall as your father.  
 b. The little dog barked as noisily as the big one.  
 c. The hopes of a tramp are as important as the hopes of a lawyer.

(4a)の例文では比較されている人に年齢の差がある。主語が年下で、比較の基準になっている人が年上である。つまり、主語の方が後から追いかけているのである。そうすると、この文はたんに「背の高さが同じくらい」というのではなく、そこに至るまでの過程も表していることになる。「大きくなったねえ、お父さんと変わらないじゃないか」ということである。また(4b)の文では、体格に歴然と差のある2匹の犬を比べて、その体格の違いにもかかわらず、吠え声のけたたましさについては、小型の犬が負けていないことを表している。(4c)の例文でも、社会的地位などの差を踏まえた上で as...as... の構文を用いていることがわかる。いずれも、ある性質については劣位であるものが、当該の文で表されている性質に関しては負けていないことを表している。

もっと言えば、負けていないだけでなく、追いつく側と追いつかれていた側に勢いの差があるとすら感じられる。これをモードで表すと次の(5)のようなイメージになるのではないかと思われる。

- (5) A is as  $\alpha$  as B における勢いの差



$\alpha$  という性質に関して、すでにそこに到達している B にたいして、後から追いついた A の方に勢いがあるといったイメージである。

さらに、「追いつく」というだけではこの構文の意味を正しく捉えていない。Bolinger (1972 : 28)<sup>2</sup> に重要な指摘がある。次の例文を見てみることにしよう。

- (6) a. Mary is as tall as Jane, maybe taller.  
b. \*Mary is as tall as Jane, maybe shorter.

as...as... の構文を用いると、上向きの解釈を続けることができるが、下向きの解釈を続けることはできない。つまり、as...as... は「同等比較」(comparison of equality) ではないということである。as はもともと all-so の縮約形であり、その意味するところは not less than (劣っていない) である。ある性質に関して、主語が、比較の基準になっているものに劣っていないことを表しているのである。

さらに Bolinger (1972 : 28) の別の例文を見てみることにしよう。

- (7) a. John is just as tall as you are, maybe taller.  
b. John is just as tall as you are, no more.

(7a) の文は as...as... に just のような強意表現を付けても同等性を強調することにはならず、むしろこの構文本来の上向きの解釈が強められることを示しているものである。ところが、ボーリンジヤーは (7b) の用例の説明に困っているようである。as...as... のベクトルが常に上向きであるならば、その上向きを否定する no more を続けることができるはずがないからである。しかし、これは特に説明に困る用例ではないと思われる。

(7b) の例文は次の (8) の文と同義である。

- (8) John is just as tall as you are; he is no taller than you are.

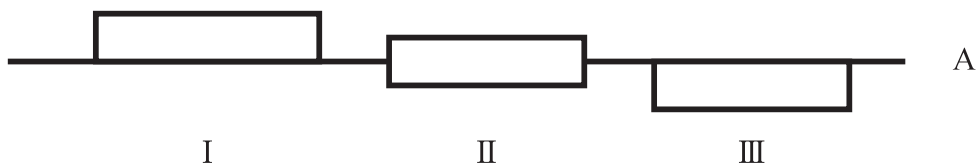
more than という表現はその後に続く概念を含まないことは周知の事実である。more than one といえば、1 を含まないから、「2 以上」であって「1 以上」ではない。そうすると no taller than you are といえば、「あなたより背が高い、ということはない」と言っているだけで、相手と変わらないことを否定しているのではない。否定しているのは「相手より低い」という明らかな下向きのベクトルである。

この事情を図で表してみることにしよう。

---

<sup>2</sup> Dwight Bolinger (1972) *Degree Words*, Mouton.

## (9) as...as A の意味範囲



as...as... は A に届いていない範囲を表すことができないから、Ⅲの範囲が除外される。またⅡに関しては、たとえ A を上回る範囲を含んでいても、A に届いていない範囲を含んでいるから、これも除外される（「同じくらい」というのはこのⅡに相当する）。A に届いていない範囲を含んでいないのはⅠのみである。ここで重要なことは、Ⅰが A に接する部分を含んでいることである。もし A から離れていたならば、more than の意になってしまう、(7b) の用例が説明できなくなる。(6)-(7) の用例が示している as...as... の意味範囲は、下限が A に接し、かつそれを越える部分を含む、Ⅰである。

この意味範囲を言葉にすれば、次の(10)のようなものが候補に挙げられるであろう。

## (10) Aに「すぐるとも劣らない」「引けを取らない」「負けていない」「遜色ない」

日本語を用いる必要がある場合にどの訳語を採用するかは文全体の意味や文脈によるが、少なくとも「同じくらい」というような不正確な日本語で理解しないことが肝要である。

ここに至ってようやくジーニアス英和辞典の記述にたいする2つの疑問に答えることができるようになる。(3-2)の文を再掲することにしよう。

## (11) (= 3-2) He is not as tall as his brother.

- a. 兄より背が高い (×)
- b. 兄より背が低い (○)

まず、背の高さで先行している人が比較の対象になるから、特別の文脈があるのでないかぎり、his brother は「兄」の意になる。やや仮想的であるが、he が「兄」で his brother が「弟」になることはけっしてないかという、もちろんそういうことはない。しかしその場合、弟が背の高さで先行していることが条件である。たとえば双子の兄弟があって、弟が背の高さで先行していたとしよう。そして兄の方も次第に身長が伸び出したが、まだ先行している弟にはかなわない。と、そんな文脈があれば、同じ例文でも his brother は「弟」の意になる。どちらであっても原則は首尾一貫している。

次に否定の意味であるが、「背の高さが兄に劣っていないということはない」というのであるから、「劣っている」である。「同じくらい」という表現を用いるからいけないのであって、はじめから正確な表現で解釈すれば、否定文になっても問題は生じない。

以上の考察を実際の文章の解釈に当てはめてみることにしよう。次の文章は書評にたいする反論をその書評の掲載誌に投稿したものの一部である。

- (12) We are two of the scientists who worked with Genie almost from the very beginning of her 'emergence' from her isolation. One of us wrote a book detailing Genie's linguistic and cognitive development and discussing both the scientific and human aspects of the case. We are probably as knowledgeable about this tragic story as anyone, and are thus appalled by the inaccuracies in the review which are too numerous to mention in this forum. We offer but a few examples.

(Curtiss and Fromkin 1993)<sup>3</sup>

まず投稿者（2人とも著名な言語学者である）は議論の対象になっているテーマについて十分な知識を持っていることを強調している。そのうえで、as...as... の構文を用いた下線部の文が出てくる。その部分を取り出してみよう。

- (13) We are probably as knowledgeable about this tragic story as anyone.

この文を「同じくらい」という日本語を用いて訳してみるとどうなるであろうか。「わたくしたち2名はこの悲劇についてどんな人とも同じくらいの知識を持っていると確信しています」というくらいになるであろうか。これでは文意が台無しである。議論の対象になっているテーマについて、投稿者は当初より関与しており、一人は本を書いている。そんな人が「どんな人とも同じくらいの知識」しか持っていないなどと、しかも「自信を持って」(probably) 言うことなどありえないであろう。この文は「この悲しい事件についての知識は〈どなたにも引けを取らない〉と確信しています」というくらいに解釈しなければ意味が通らないのである。

次に、as...as... 構文の不思議な（しかし頻繁に見かける）用例について考えてみることにしよう。

- (14) Michael Jackson has changed his face as often as his costumes.

この文はマイケル・ジャクソンが存命中に書かれた文章から抜粋したものである。この文で何が不思議かというと、この文をそのまま解釈すると、整形手術の回数が衣装替えの回数を下回っていないということを言っていることになるからである。いくらなんでも整形手術の回数が衣装替えの回数に劣らないというのは虚偽である。(14)の文はそういう

<sup>3</sup> Susan Curtiss and Victoria Fromkin (1993) "To the Editor of *The New York Times Book Review*," (<http://linguistlist.org/issues/4/4-394.html>)

現実に反する内容を表現しているのである。

(15) (14) の文における整形手術の回数と衣装替えの回数の比較

現実：整形手術の回数 < 衣装替えの回数

表現：整形手術の回数  $\geq$  衣装替えの回数

この種の文はどう解釈したらよいかというと、程度を誇張した用法と考えればよいと思われる。「整形手術の回数が衣装替えの回数を下回っていない」というのでは現実世界と整合しない。これを「衣装替えの回数に劣らないほど何回も整形手術をしている」とすれば、整形手術の回数が尋常でないことを誇張した言い方として成立する<sup>4</sup>。

この種の誇張の用法は頻繁に見られる。次の例文を見てみることにしよう。

(16) Two could live as cheaply as one.

論理的に言えば、一人より二人の方が家計費がかかるはずであろう。ところがそれを as...as... で表現すると、「二人で暮らした場合の家計費は一人で暮らした場合の家計費に負けないくらい安くあがる場合もある」ということになり、「場合によっては二人で暮らした方が安上がりになる場合もあります」という含みを持つことになる。ここに「同じくらい」という表現を持ち込んだら筆者の意図をつぶすことになる。

既出のジーニアス英和辞典の例文についても見てみることにしよう。訳文もそのまま引用する。

- (17) a. The twins are as alike as two peas in a pod. (その双子はさやの中の2つのえんどう豆のように似ている)  
 b. Her face turned (as) white as flour. (彼女の顔は粉のように白くなった)  
 c. She scolds Terry as often as (she scolds) me. (彼女は私をしかるのと同じくらいよくテリーをしかる)

(17a) の例文は「その双子はさやの中の2つのえんどう豆どころかそれ以上によく似ている」という含みである。(17b) の例文は「彼女の顔は粉の白さに負けないくらい(いやそれ以上に)真っ白になった」という含みである。(17c) の例文は「彼女はよく私をしかるが、それに劣らずテリーもしかる(もしかしたらテリーをしかる方が多いかもしれない)」という含みである。いずれも、単純な「同等」ではないことを表しているのである。

<sup>4</sup> (14) の例文が誇張的な解釈になることについて、査読委員の一人より次のようなコメントをいただいた。(5) の図に照らし合わせてみると、「A(マイケルの顔の変化)」というインパクトが強すぎて、それは B(マイケルのコスチュームの変化) が達している  $\alpha$  に限りなく近づくくらいの規模の衝撃を持っている」から、自然と誇張としての解釈が生まれるのではないかと、興味深い見解であると思う。

このように見てくると、ある表現について、これまでほとんど気づかれていなかったと思われる意味の世界が開けてくるようになる。次の (18) の表現を見てみることにしよう。

(18) as much as possible

この表現は「できるかぎり」というような日本語で理解されていることが多いように思われる。She helped him as much as possible. というような文であれば、「できるかぎりの援助をした」というように。それでこの表現の真意がどれだけ伝えられているであろうか。

possible は「能力」の意であるから、比較の基準を「能力」とするならば、as much as possible というのは、「自分の能力を下回ることなく」ということになり、同時に「能力以上に」という含みを持つことにもなる。だれも自分の能力以上のことはできないというふうに考えると、この表現は無理なことを表していることになるであろう。「できるかぎり」という日本語は下から天井（能力の限界）を見上げている感じであり、as much as possible は「場合によっては能力の限界を超えてさえ」という含みを持つ表現であるということである。そう考えると、as much as possible というのは、上限を表す表現ではなく、下限を表す表現であるということになってくるであろう。

as...as... 構文に関していま一つ注意すべき用法がある。「追加」を表す用法のものである。次の例文を見てみることにしよう。

(19) Ageism affects the young as well as the old.

「年齢による差別は、高齢者はもちろんのこと若者にも影響を与えている」というほどの意の文である。職探しで年齢差別がある場合、真っ先に影響を受けるのが高齢者であることは言うまでもない。それが若者にも影響を与えているということを伝えているのがこの文である。この文の場合、the young と the old の語順を入れ替えることはできない。次の (20) の文は（文法的には可能だが）内容は不可解である。

(20) ??Ageism affects the old as well as the young.

どうして目的語の語順が入れ替えられないかという、as...as... の構文を用いているからである。A... as...as B. の構文では A が B にたいして優位にたっていると解釈されるのが通例であり、A と B は同等ではない。(19) の用例に則して言えば、年齢差別で真っ先に影響を受けるのは老人 (b) であり、これは言うまでもないことである。それにたいして若者 (a) にも影響があるということがニュースになっている。つまり、A... as...as B. の構文においては B の方が軽い位置づけなのである。そのような位置づけの軽重を勘案すると、「追加」を表す用法の A as well as B は「B はもちろんのこと A も」と A の方に重点を置いた解釈になるのである。



もちろん、as...as... であるから、重要さが変わらないという意で用いられる場合があってもいっこうに差し支えない。また、文末の要素 B の方に重点を置いているような用例があっても、これまたいっこうに差し支えない。何かの拍子にそういう使い方をしてしまう場合もあるだろう。英語の母国語話者だからつねに英語を正しく適切に使っているという保証はどこにもないことに留意すべきである。

## 2. as tall as における tall の意味

as...as... の構文を別の視点から考えてみることにしたい。次の文を見てみることにしよう。

(1) He is as tall as his brother.

この文における tall は「背が高い」でよいであろうか。先回りして結論を言えば、「背が高い」という解釈は必ずしも正しいものとはいえない。

次の(2)の表現を見てみることにしよう。

(2) tall taller allest

試みに、この3つの中で本当に背が高いことを表すのはどれであるかと問うてみよう。それは最上級の tallest ですと答える向きもあるかもしれない。が、その回答は必ずしも正しくない。本当に背が高いことを表すのは原級の tall である。なぜであるかという、taller は「比べている2人の中で大きい方」ということであるから、小さな人同士を比べている場合でも用いられる。そして tallest は「比べている3人以上の人の中で一番背が高い」というだけのことであって、この場合も小さな人同士を比べている場合でも用いられるのである。それにたいして、tall は、話し手と聞き手が属する社会のだれが見ても背が高いと認定される人にしか用いられない。

同様に次の(3)の一連の表現を見てみることにしよう。

(3) small smaller smallest

この場合も(2)と同じ問いを發してみよう。この中で本当に小さいことを表すのはどれであろうか。smaller は2人の人の中で背の低い方を表すが、その場合、比較の対象になっている2人はともに背の高い人同士でもかまわない。身長2メートルの人と、190センチの人を比べてどちらが smaller であるかと問うことは可能なのである。smallest の場合も同様であり、3人以上の人の中で一番背が低い人を表す。この場合、全員が背の高い人同士であってもいっこうにかまわない。それにたいして small は、当該社会のだれが見ても小さいと認定される人を表すのである。そうすると本当に背が低いことを表すのは small という原級であることになる<sup>5</sup>。

このように見てくると、原級と比較級・最上級の間には大きな断絶があることが知られるであろう。原級は当該社会における通念としての絶対概念を伝えるが、比較級・最上級は、個別に設定された基準にもとづく相対概念である。(2)-(3)の例に則して解説すると、tallは「背が高い」の意であるが、taller/tallestは背の高い人と背の低い人のどちらにも用いられるから、「身長」の程度を表すのみである。smallは「小さい」の意であるが、smaller/smallestは小さな人と大きな人のどちらにも用いられるから、この場合も「身長」の程度を表す。換言すれば、形容詞なり副詞が単独で用いられている場合は絶対概念であり、なんらかの修飾要素を伴う場合は相対概念になるということである。

次の(4)の文を見てみることにしよう。

(4) How old is he?

この文におけるheは高齢者であるとはかぎらない。小さな子どもであってもよい。how oldは「(世界一の長寿だということですが、) いったいどのくらいの長寿なのですか?」の意とはかぎらず、たんに「年齢」を問うだけの場合もあるのである。

そうすると冒頭の(1)の文は2通りにあいまいであることになる。

(5) (=1) John is as tall as his brother.

(1) ジョンは兄に劣らず背が高い (二人とも背が高い)

(2) (2歳になったばかりの) ジョンの身長は (年子の) 兄にもう追いついている (身長を比べているのみ)

as...as... は「同等比較」ではないが比較の一種であるから、as...as に挟まれた形容詞や副詞は相対概念を表すことになる。その相対概念の程度は文脈によって決められる。その程度が非常に高い場合は原級と変わらない意味で用いられることになり、その程度が低い場合はその形容詞なり副詞が名詞化された場合の意味 (tall ならば height) のごとく中立的な意味で用いられることになる。

以上の考察を踏まえた上で、次の文を見てみることにしよう(高橋秀夫氏の提供による)。硬貨を小さな順に並べた文である。

(6) The smallest coin of all is the penny. The penny is worth one cent.

The next biggest coin is the nickel. The nickel is worth five cents.

The next biggest coin is the dime. The dime is worth ten cents.

<sup>5</sup> small より smallerの方が小さいことを表す用法があることを否定しているのではない。別項目で挙げる例文(「4. a number ofは「多くの」の意か」の(4)の例文)に small-smallerの組み合わせがあるが、「最初に言及した小ささよりさらに小さい」というように、比較の基準が固定されている場合は、small-smaller-smallestの順序関係に意味がある。

The next biggest coin is the quarter. The quarter is worth twenty-five cents.

The next biggest coin is the loonie. The loonie is worth one dollar.

The biggest coin of all is the toonie. The toonie is worth two dollars.

(*The Coins Go Rolling*)

ここで問題になるのは2行目（から5行目まで）の最上級表現である。第一の文は最小の硬貨である1セント硬貨のことを述べている。硬貨の中で最小であるから the smallest と小さい方の最上級で表されている。その次に来るのが5セント硬貨である。小ささの点では1セント硬貨の次であるから、論理で筋を通そうとすれば、the next smallest coin という表現が予想される場所である。それが the next biggest coin となっているところに問題がある。

すでに見てきたように、最上級は相対概念であるから、本当に大きなものを表しているとはかぎらない。(6)の biggest は、文脈から読み取られるように、「小さい」ことを表す「大きさ」である。つまり size である。size は大から小まで広範囲にわたる。その size がどのくらいのところかには文脈に依存することになる。この場合は the smallest の直後に置かれているから、小さい方に目盛りが振れていることになる。これが「小さい」ことを表す「大きさ」ということである。

このように見てくると、the smallest coin の後に the next biggest coin という表現が続いても不自然であるということにはならないということになってくる。

もちろん、2番目の文において the next biggest coin の代わりに the next smallest coin という表現を用いても、特に問題になることはない。ただ、big の場合は「大きい」と「大きさ」の意味になりうるが、small の場合は、「小さい」ことしか表せない。「小ささ」としても、大小の幅はなく、目盛りの小さい方の狭い範囲を表すのみである。

そうすると、the next smallest とする方が厳密さという点からすればけっこうであるが、500円硬貨（直径26.5mm）より大きいカナダ2ドル硬貨（toonie）（直径28mm）へと話題を移していく文においては、smallest を使い続けることができないのである。そこで小から大まで広範囲に表しうる big を用いて、最後の biggest へと円滑に接続させていると考えられるのである。

### 3. Thank you very much は「ありがとうございます」か

J. K. Rowling の世界的なベストセラー、*Harry Potter and the Philosopher's Stone* は次の文章で始まっている。

- (1) Mr and Mrs Dursley, of number four, Privet Drive, were proud to say that they were perfectly normal, thank you very much. They were the last people you'd expect to be involved in anything strange or mysterious, because they just didn't hold with such nonsense.

この冒頭の文章には不思議な表現がある。ダーズリー夫妻の言葉の最後にある *thank you very much* である。松岡佑子氏の邦訳<sup>6</sup>では次のように訳出されている。

- (2) プリベット通り四番地の住人ダーズリー夫妻は、「おかげさまで、私どもはどこから見てもまともな人間です」というのが自慢だった。不思議とか神秘とかそんな非常識はまるっきり認めない人種で、まか不思議な出来事が彼らの周辺で起こるなんて、とうてい考えられなかった。」(下線は久保田、傍点は邦訳のまま)

この *thank you very much* は同じ文の中にある *perfectly* という副詞とある種の係り結びの関係にある。まず *perfectly* の意味から見てみることにしよう。COBUILD は次のように定義している。

- (3) You can use **perfectly** to emphasize an adjective or adverb, especially when you think the person you are talking to might doubt what you are saying.

つまり、相手がこちらの言うことに疑念を抱いているかもしれないと思われるときに、(normally/well/nice などの肯定的な) 形容詞や副詞を強調してその疑念を打ち消そうとするのである。「どこから見ても、正真正銘、～ですよ」というくらいである。

一方、*thank you very much* という表現も *much* という否定的な表現を含んでおり、単純に謝意の表明として用いられるばかりではない。むしろこの場合は、ほとんど *perfectly* あるは *obviously* と同義であり、しかも、自分の発言に疑念を抱いている人があることに不快感を示していることが感じられる。この語感に近い用法が COBUILD に掲載されている。

- (4) You use **thank you** or **thank you very much** in order to say firmly that you do not want someone's help or to tell them that you do not like the way that they are behaving towards you.

*I can stir my own tea, thank you...*

*We know where we can get it, thank you very much.*

Oxford Advanced Learner's Dictionary にも類似の定義が挙げられているから、*thank you (very much)* を「不快感の表明」で用いるのはごくふつうの用法なのだろう。ただしアメリカ系の辞典には掲載されていないようであるからイギリスに限った用法なのかもしれない。ハリー・ポッターの作者 J. K. Rowling はイギリス人である。

いずれにしても、*perfectly* と *thank you very much* には否定的な意味合いの用法があ

<sup>6</sup> 松岡佑子 (訳) 『ハリー・ポッターと賢者の石』、静山社。

り、この2つの表現が相乗して、ダーズリー夫妻の不遜な態度をいっそう強調した形で表現しているのと解される。そう解釈してはじめて、「『私たちはまともである』と胸を張って言う」という、ふつうの人なら恥ずかしくて取れないような態度も、この人たちなら、むべなるかなと、納得されるのである。

以上の解釈を組み込んで(1)の文章の大意を添えておくことにしよう。

- (5) プリベット通り4番地の住人、ダーズリー夫妻は、「だれが何と言おうと、私たちはいたってまともな人間です」と胸を張っている。なるほどかれらは、不思議なこと、変わったことにはおよそ関わりそうもない人たちのようである。それもそのはず、そんなことは馬鹿げているとしか思えない人たちなのだから。

ところで、thank you very much という表現にたいする用心の出発点は、否定的な意味合いの much が含まれているからであるとした。通例、much は否定文(あるいは肯定文を疑問視する疑問文)に用いられるものである。この否定専用表現はほかにもいくつかある。肯定専用の表現と対比した形で代表的な例をいくつか挙げてみることにしよう。

- (6) 否定専用の表現と肯定専用の表現

much	} a lot of
many	
could	was able to
far	a long way

(6)の表の左側が否定専用の表現であり、右側が肯定専用の表現である。否定専用の表現とは、通例、notのような否定要素とともに用いられるものであり、肯定専用の表現とは肯定文でのみ用いられるものである。

たとえば、次の(7)の文はいずれも否定専用の表現を肯定文で用いたものであるが、そのままでは容認されないか、あるいは不自然である(\*は容認不可能であることを表す。?は容認不可能ではないがそのままでは不自然であることを表す。いずれも括弧内の表現に換えれば問題はなくなる)。

- (7) a. \*I have much money. (I have a lot of money.)  
 b. ?I have many friends. (I have a lot of friends.)  
 c. \*After six hours' climbing, we could reach the top of the mountain. (... we reached the top of the mountain.)  
 d. ?The station is far away from here. (The station is a long way away from here.)

ところがこの否定専用の表現が肯定文で用いられることもある。次の(8)の例を見てみることにしよう。

- (8) a. He is apt to notice and make much of trivial faults or defects.  
 b. He is much/far taller than his brother.  
 c. My mom is a total water-phobic. She could swim as a child, but just stopped when she grew older, and confessed frequently that she just “couldn’t bear swimming knowing there were 50 metre ice-cold waters underneath her (referring to the mountain lake my dad and I used to swim in)”.

(8a)の文は「あの人は、他人の取るに足らない過誤が目が付いて、それをあげつらうところがある」というほどの意である。つまり、「本来なら、そんなことをあげつらう必要はないのに」という否定的な意味合いを含んでいる。

(8b)の文は、「あの人はお兄さんより、ずっと、背が高い」ということである。この場合、弟の方が背が高いということ自体は文脈から引き継いでいるが、その身長差が、聞き手が想定している程度をはるかに超えていることを表している。「あなたが思っているどころではありませんよ」ということである。

(8c)の文は母親の水恐怖症について述べている。その母親も子どものころは「泳げた」と could を肯定形で用いているが、その直後に、泳いでいたところが水深50メートルもの深さのところであったと知ってからというもの、怖くて泳げなくなったと述べている。肯定形の could は「いまはそうではない」という否定内容の前置きとして用いられている。

いずれの例においても、否定専用の表現が肯定文で用いられていても、単純な肯定内容を表すのではなく、つねに否定内容を予想させる用い方になっている。つまり、否定専用の表現はどんな場合でもつねに否定的な内容を伝えることをその機能としているのである。したがって、単純な thank you とちがって、thank you very much となると、たとえ感謝の意で用いられていても、「そこまでしていただけたとは思いませんでした。本当にありがとうございます」といった誇張的な言い方になったり、逆に、「余計なことはしないでください」とか「だれが何と言おうと」といった、相手に対するある種の敵対的な物言いにもなる。もちろんこの種の敵対的な意は thank you だけでも表せるが、(very) much が付随するといっそうその意が明確に表される。冒頭の(1)の文章における thank you very much はダーズリー夫妻の性格(の悪さ)を端的に表しているのである。

#### 4. a number of は「多くの」の意か

具体的な数字が挙げられていない数量表現の解釈はやっかいである。たとえば some と few はいくつを表すかと問われても、なかなか答えられない。しかし、some は下限が2であり、few は下限が3であることを知れば、ある程度、使い勝手もわかってくるであろう。(a) few people といえば、「2, 3人」ではなく「3人以上」であることになる。ま

た one or two という表現などは、or を [ɔ:ə(r)] と発音すれば「1または2」、[ə(r)] と発音すれば「2、3の」という意になる。

そういう数量表現にあって、現実の用法と英和辞典の記述にやや隔たりがあるように感ぜられるものに a number of という表現がある。ここでもジーニアス英和辞典の記述を見てみることにしよう。

(1) 『ジーニアス英和辞典』の記述

[語法] [a number of] (1) 「多数の」, 「若干の」のいずれの意味かは前後の文脈によるが、現在では「多くの」の意に用いるのが普通。いずれの場合も否定文・疑問文には用いられない。(2) 数を明示する時には a large [great, good] ~of boys 「多くの少年」, a certain~of people いくらかの人々, a small~of mistakes 「少数の誤り」のようにする。

この記述にはよくわからないところがある。それは、large/great/good/small 等の形容詞が付随しているときは「多い」とか「少ない」といった意が明確に表されるが、a number of を単独で用いた場合でも「『多くの』の意に用いるのが普通」であるとしているところである。大を表す形容詞が付けば「多くの」の意になり、小を表す形容詞が付けば「少数の」という意になるのであれば、そのような修飾要素のない場合は中立的な意になるように思われるのである。

英米の辞書の記述を見てみることにしよう。

- (2) a. A number of (= some) problems have arisen. (*Oxford Advanced Learner's Dictionary*)  
 b. If there are a number of things or people, there are several of them. (*COBUILD*)  
 c. She gave me a number of (=several) suggestions. (*Newbury House Dictionary of American English*)  
 d. a quantity, especially a rather large quantity (*World Book Dictionary*)

イギリスの辞書 (OALDとCOBUILD) は some や several を用いて定義しており、「いくつかの」というほどの意であるとしている。アメリカの辞書は、NHDAE ではイギリスの辞書と同じく「いくつかの」と定義しており、WBD では「不定数、いくぶん多めの」の意としている。

ただし、「多くの」という場合でも、WBD のように rather を用いてやや抑え気味の言い方になっているところを見ると、修飾要素のない表現のまま多数の意で用いられることがあっても、必ずしも文字通りの「多数」ではないようである。

次の例を見てみることにしよう。

- (3) Divert a number of seat cushions, say 50 to 100 from the normal selling positions to the little booths where we worked selling scorecards.

「50から100」という数字のみを見ると「多い」と感じられないこともないが、この文はシート用のクッションの一部を本来の売り場から小さな売り場 (little booths) へ移すことを表したもので、話し手の意識では「大量」というのではなく、むしろ「いくらか」というくらいであろうと思われる。

一般に、「多くの」という意に解釈される用例を見てみると、共起する名詞が「小さくて集団をなすもの」という点に共通性があるものが多いようである。次の文章を見てみることにしよう。木版印刷に代わって活字の入れ替えや再利用ができるようになった活版印刷の発明について述べた文章である。

- (4) Fortunately, sometime between the years 1041 and 1048, a man called Bi Sheng had an idea. He started to make small blocks, and on each of these he cut one word. To form a page, Bi Sheng put a number of smaller blocks together. After the page was printed, the blocks could be used again.

(David Maule, *Inventions that Changed the World*)

文中の a number of smaller blocks は「多くの」の意で解釈できるものである。ただそれは、1 ページをつくるのにどのくらいの数の活字が必要になるかといった文脈や、smaller blocks (もっと小さく作られた活字) という表現との相乗によって惹起された意味であって、a number of 自体が本来的に「多くの」という意味を持っているからというのではないように思われる。

以上のことを考え合わせていくと、この表現は「いくつかの」というくらいの抑え気味の数値が基本となる意味であり、これに文脈が加わって一定の範囲で数値の振幅が生まれるというふうを考えるのがよいと思われる。

それでは、この表現の基本意味であると考えられる「いくつかの」とは具体的にいくつなのであろうか。その点について国内外の辞典で明確に記述しているものは見当たらない。そこで、この表現の内容記述として具体例が挙げられている場合、それがいくつ挙げられているかという視点から手元の用例を調査してみた。次の(5)の例を見てみることにしよう。

- (5) a. The situation is similar in a number of acceding countries (Cyprus, Hungary, Latvia and Malta).  
 b. There is another form of the adversative relation, also internal, which we may perhaps regard as being the INTERNAL equivalent of the CONTRASTIVE sense identified above, that of 'as against'. This is expressed by a number of very frequent items such as *in fact, as a matter of fact, actually, to tell (you)*



*the truth.*

- c. Producers may wish to offer links to external sites for a number of reasons, including:
- for further relevant information
  - for further background information or other key source material
  - for useful practical information
  - for further informed comment.
- d. Language is not a huge collection of paired associates; a number of considerations dispute such a simple association theory of language. First, it is not clear whether ...Second, aphasic symptoms give little support for...Third, there is not evidence that ....Fourth, audio-visual associations can hardly be relevant to...

(5) は手元の用例の中からもっとも典型的と思われるものを選んだものである ((5d) は長い文章のため重要な箇所のみ引用した)。(5a) の例では該当する国として4つの国が挙げられている。(5b) の例でも4つの具体例、(5c) でも4つの理由が挙げられている。

(5d) の場合は first, second といった序数の副詞表現で fourth まで挙げられている。この他の用例でも具体例が挙げられている場合はおおむね4つである。a number of は、通例、4つくらいを念頭に置いている例が多いようである。

もちろん4つ以上の数が読み取れる用例があってもかまわない。ここで問題にしているのは、この表現の中心となる数値がいくつであるかである。それが4ぐらいであるらしいというのが、わたくしの調査結果である。したがって、修飾要素のない a number of が「いくぶん多くの」という意で用いられている場合でも4からそれほど離れていないか、あるいは数値自体は大きな場合であっても ((4) におけるような用例は例外として) その数値を話し手はそれほど大きなものとは考えていないというくらいに解釈しておくのがよいのではないかと思われる。

## 5. un- の意味

接頭辞の un- の基本的な意味は「逆」である。否定の意味ではない。次の例を見てみることにしよう。

- (1) 動詞の例：unlock (鍵を開ける)、undress (脱ぐ、脱がせる)、unwrap (剥ぐ)、uncoil (伸ばす)、undo (元へ戻す)
- 形容詞の例：unhappy (絶望的に不幸な)、unkind (冷酷な)、unfair (ずるい)

たとえば unlock ならば「鍵を掛けない」ではなく、「(「鍵を掛ける」の逆で)「鍵を開ける」である。undo は「しない」ではなく、「(したことを逆にする)「元へ戻す」である。

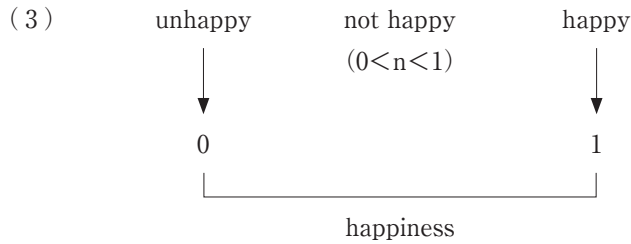
最近のパソコン用語としてよく見かける *uninstall* は（「ソフトをインストールする」の逆で）「インストールしたソフトを元の白紙の状態に戻す」である。

形容詞の場合も同様で、*unhappy* は「しあわせではない」ではなく、（しあわせの逆で）「絶望的に不幸である」の意である。*unkind* は「親切ではない」ではなく「冷酷な」の意。*unfair* は「公平ではない」ではなく「ずるい」の意である。いずれも非常に強い調子の表現である。

*un-* が単なる否定でないことを、*happy* と *unhappy* の例で見てみることにしよう。次の（2）の文に見るように、*not happy* と *unhappy* は意味領域が重ならない形で用いることができる。

- (2) I am not happy, but not unhappy. (わたしは「しあわせ」というのではないけれど、「絶望的に不幸」というのでもない)

*not happy* と *unhappy* の意味領域を図で表してみることにしよう。



「しあわせ度」(degree of happiness) を最大で1、最小で0ととってみることにすると、しあわせ度の最大は修飾要素のない *happy* で表される。そして、これに *un-* を付けると、数値が逆の極に振れて、しあわせ度がゼロになる。これは *not happy* とは異なる。*not happy* とは、「しあわせ度が最大値でない」ということであるから、 $n < 1$  の範囲を指すものである。ただし、 $n < 1$  ではゼロも含まれることになり、*unhappy* の意味領域と重なるところがあることを認めることになる。が、現実には、(2) の例文で示されるように、*unhappy* で表される「しあわせ度ゼロ」と重ならない範囲で用いられているようである（(3) の図で *not happy* を  $0 < n < 1$  としたのはこの理由による）。

このように、*un-* は対応する表現の対極の意味を作り出す接頭辞なのだが、これを「否定」の意で理解している学習者が少なくない。実際、一見すると否定と区別しにくい用例もある。このことについて少し考えてみることにしよう。

- (4) a. His father was an unemployed labourer. (失業中の)  
 b. An unattended bag was spotted near the platform at Gatwick. (放置されている)

2つの文とも COBUILD の例文である。COBUILD は unemployed や unattended をいずれも否定要素 (not) を用いて定義している。

- (5) a. Someone who is **unemployed** does not have a job.  
 b. When people or things are left **unattended**, they are not being watched or looked after.

この、定義を否定文で表しているところに問題がある。定義は語彙の意味の「解説」であって、語彙の意味と必ずしも等価ではない。その解説文に否定要素があるからといって、当該の語彙そのものの意味に否定が含まれていると考えてはならない。たとえば「失業中」という肯定形の表現を「仕事に就いていない」というような否定形で定義することは可能である。「放置されている」という肯定形の表現の場合も、「責任者がその場にはいない」というくらいの否定文で定義することも可能である。しかし「失業中」も「放置されている」もそれ自体は肯定形である。辞典は肯定形のままではわかりにくいと判断したから否定文で解説しているにすぎない。たとえば Webster 3 版は unemployed を not employed と定義しているが、Oxford Advanced Learner's Dictionary は without a job although able to work と、じつに配慮の行き届いた肯定形の定義を挙げている。

さらに次の例も見ておくことにしよう。

- (6) a. Jane Austen's unfinished novel (未完の)  
 b. Dealers across the country continue to complain about huge stocks of unsold cars. (売れ残っている)

unfinished は「終わっていない」、unsold は「売れない」と否定で理解してよさそうに見えるが、これも厳密に解釈してみよう。unfinished は finished の逆であるとするならば、「完成」の逆は「中途半端」である。つまりは「未完」ということである。unsold は sold の逆であるとするならば、「売れる」の逆は「売れ残る」である。「売れない」は「売れる」の否定であって、逆ではない。否定と逆のちがいは、否定は原概念のプラスの極以外のすべての領域を指す静的なものであるが、逆は原概念と同じ強さで「対立」する動的なものである。「未完」には完成を期待している人を落胆させる力強さがあり、「売れ残り」にも売り手を悩ます強烈な力がある。

以上で un- の基本的な意味の解説を終える<sup>7</sup>。

次に、un- が持つ含意について触れることにしたい。次の (7) の例を見てみることにしよう。

- (7) A blood-covered girl screamed after her parents were fatally shot by soldiers with the 1st Battalion, 5th Infantry Stryker Brigade Combat Team of the 25th

Infantry Division after the family failed to stop driving their car. The girl was uninjured.

兵士から銃撃を受けて両親が死亡し、同乗していた娘も血まみれになって泣き叫んでいたが、じつはその娘は「無傷」だった、という内容である。un- という接頭辞は、当該表現から un- を取り除いた肯定内容が本来期待されたものであるという含みがある。(4) の例に則していえば、第一の文の内容から、当然、娘の負傷が予想される場所であるが、その予想に反して、けがさえしていなかったというのである。そういう内容を表すのに(not injured ではなく) uninjured という表現が用いられる。これが un- の特徴的な含意である。

このような un- と as...as... を巧みに組み合わせた文章がある。15ページに引用したハリー・ポッターの文章の少し下にある次のような文章である。

- (8) Mrs Potter was Mrs Dursley's sister, but they hadn't met for several years; in fact, Mrs Dursley pretended she didn't have a sister, because her sister and her good-for-nothing husband were as unDursleyish as it was possible to be.

(ポッター夫人はダーズリー夫人の妹だが、ふたりはもう何年も会っていない。それどころかダーズリー夫人は、自分に妹などいないと言い張っている。というのも妹とそのろくでなしの亭主ときたら、あろうことか、ダーズリー家とは正反対の連中なのだった。)

この文章の見せ場は unDursleyish という造語にある。Dursley という名字から Dursleyish という形容詞をつくり、そこに un- を付けているのである。「ダーズリー家の性質を持った」の逆であるから、「ダーズリー家とは正反対の」というくらいの意になる。ダーズリー夫人はダーズリー家の家風こそ最良と考えているような性格であるから、ポッター夫妻がダーズリー家とは相容れない正反対の性格であることを忌み嫌っている。その強い嫌悪を表したのが unDursleyish (あろうことか、ダーズリー家とは正反対である) である。そしてそれを as...as it was possible to be (どうしてそこまでできるのかと思われるほど) で囲って表現したことで、嫌悪を越えた敵意まで表現しているのである。

<sup>7</sup> ジーニアス英和辞典の un-<sup>2</sup> の語法欄に次のような解説がある。

[語法] -able, -ed, -ing で終る形容詞については2通りに解される場合がある: undressed 服を脱いだ (un-<sup>2</sup> より); 服をまだ着ていない (un-<sup>1</sup> より)。

undressed が2通りに解されるのは un- に2つの種類のものがあるからであるというのである。これは正しくないと思われる。un- に2つの種類のものがあるからではなく、dressed に動詞性の強い受動態の用法と、状態性の強い形容詞の用法があり、それぞれの意味の逆をとれば、(受動態の用法の)「服を着させられた」の逆だから「服を脱いだ」となり、(形容詞の用法の)「服を着ている状態にある」の逆だから「裸(同然)である」の意になるのであると思われる。

## 6. 総括

以上、5つの表現について精緻な意味論的分析を加えた。本文でも言及したように、いずれも辞典類では必ずしも正確な記述が施されているとはかぎらないものであり、その結果、不正確な日本語訳が流通していることが多い表現でもある。取り上げた表現はどれも小さなものであるが、形態上の小ささに反して意味上は重要な役割を担っている。当然のことながら、そのような小さいながらも重要な表現の解釈が不正確であったならば、文全体の解釈も不正確なものになる。本稿はそのような表現の本来の姿を精密に描き出そうとしたものである。